

いのち宣言を実現するための
アクションプラン集



いのち会議
INOCHI FORUM

2025年10月11日
アクションプラン編集チーム

いのち会議は、障がいを抱えていても、排泄の悩みがあっても、誰もがオシャレを楽しめる世界を、世界中の人びとと手を取り合い、共に創っていきます。

【参考情報】

- ・尿失禁で悩む人々の数は日本で推計1300万人以上(週一回以上の尿失禁、出典は「女性下部尿路症状診療ガイドライン」2019年)
https://www.urol.or.jp/lib/files/other/guideline/38_woman_lower-urinary_v2.pdf
- ・便失禁で悩む人々の数は日本で推計500万人以上。(月に一回以上の便失禁、出典は「便失禁の定義と疫学」味村俊樹、『臨床雑誌 外科』79(3), 212-219, 2017)
 便失禁については、65歳以上で7.5%、20~64歳で4%です。
 尿失禁について、詳細は以下になります。
 週1回以上の尿失禁:1324万人(男性486万人、女性838万人)

切迫性尿失禁:男性202万人、女性377万人
 腹圧性尿失禁:男性82万人、女性461万人
 毎日の尿失禁:612万人(男性168万人、女性444万人)
 切迫性尿失禁:男性124万人、女性219万人
 腹圧性尿失禁:男性44万人、女性225万人
 ・一般社団法人日本福祉医療ファッション協会
<https://wel-fashion.jp/about/>

【アクションパネル】

医療・福祉

【SDGs】



1-2-4

多様性を尊重することと、「ひとりぼっち」の人を社会に優しく包み込むことは、相性がよくないかもしれません。だからオープンな気持ちで、みんなでルールをつくっていきましょう

人間は誰もが、国籍や民族、障がいの有無、セクシュアリティ、年齢などの違いにかかわらず、安心して、自信をもって、自由に生きることができるよう、多様性が尊重され社会的包摂が保障される共生社会の中で暮らす権利を有しています。

しかし、個人と環境の相互作用が生み出す矛盾が常に存在します。構造的に不利な状況のもとで生きている人びとの中には、差別や貧困、社会的な不安や孤立感を抱えながら暮らしている人も少なくありません。人権の侵害状況が、日々の生活の中に横たわっています。

未来に必要とされる新しい価値や社会的仕組みは、同質性からではなく多様性の中から生み出されます。マイノリティの存在は、支援を受けるだけの受動的な存在ではなく、社会の構成員として、マジョリティの安定と発展を担う能動的なアクターでもあります。一方で、多様性を尊重する過程で、双方の「自由の相互承認」をめぐる摩擦や葛藤が必然的に生まれます。今、世界は政治的・社会的な平等と文化的な多様性の構築に向けて、どのように社会的包摂を推進していくのかという切実で難しい問題に直面しています。マイノリティの「安心・自由」への欲求と、既存秩序の浸食を危惧するマジョリティの「不安・不満」との相克です。

この相克を乗り越えるためには、粘り強い対話による課題解決とともに、「支援する側」と「支援される側」が固定化されずに、できる範囲で相互に支えあう重層的な支援関係の構築が不可欠です。さまざまな国や地域、職種やセクターをまたいで、あらゆるステークホルダーが連携協力して取り組む必要があり、その役割は、ときには重なり、ときには兼ねられ、そして入れ替わることもあります。その経験知と知恵が、共生社会の実現に向けた社会的連帯のための強固で柔軟な土台の形成につながります。いのち会議は、国や国

際的な取り組みに加えて、自らが関わる日々の現場や地域社会の小さな実践を丁寧に編み込んでいくことで、地域内循環の仕組みをつくります。

たとえば、外国籍住民比率が全国の都市部の自治体で最も高い大阪市生野区で活動するNPO法人IKUNO・多文化ふらっとは、企業と共同事業体を構成して、2022年4月から小学校跡地を活用した多文化共生のまちづくりに着手しています。特に、日本語指導が必要な外国ルーツのこどもたちが参加する学習支援活動やこども食堂を実施するなど、差別と貧困、社会的孤立の中にあるマイノリティのこどもたちのエンパワメントのための居場所と機会を提供しています。

こうした活動をさらに発展させるために、今後は以下の取り組みを推進していきます。

1. 各セクターの政策・施策等の議論・決定過程にマイノリティ当事者が参画する社会的仕組みを構築します。

政策・施策などが適用される当事者であるマイノリティが、その議論・決定過程に平等かつ主体的に参画することで、より社会的な公正さが保障され、また民主主義の原理に適います。

2. 多様性の尊重と社会的包摂の推進のための法制度を拡充するとともに、各セクターが連携協力しながら当該行動計画を策定・実施します。

多様性を尊重する意識・世論の醸成に加えて、国際人権基準に基づく教育・福祉・就労などを保障する法制度の整備と、それに基づく行動計画の策定と実施を促進します。

3. 多様性の尊重と社会的包摂の推進のための政策・施策の実施・展開のための財源を、各セクターが連携協力しながら創出します。特に財政基盤が弱く、かつマイノリティに対して直接支援をしている市民セクターへの財政的支援の社会的仕組みをさらに拡充します。

いのち会議は、さまざまな団体と協力し、こうした活動を推進することによって、「みんながオープンな気持ちでルールをつくる場」をひろめます。

【参考情報】

・ 大阪市の外国人住民数の推移: 大阪市の外国人住民数等統計のページ
<https://www.city.osaka.lg.jp/shimin/page/0000431477.html>
 ・ 〈大阪市生野区役所〉「令和6年度 外国人住民との共生社会実現に向

けた調査・施策検討業務委託にかかる 公募型プロポーザル方式による選定結果について」(2024年6月10日)

この提案は生野区在住の外国人住民の実態に関する量的調査と質的調査を実施し、同区の多文化共生施策の政策提言としてまとめ、必要な施策を実現することを目的としています。

・ NHK大阪「かんさい熱視線 だから、ここで生きていく～共生のとりで 大阪・生野～」(2024年7月5日放送)

【アクションパネル】

多様性・包摂

【SDGs】



1-2-5

言葉にならない経験をしたとき、「自分だけ?」「どうせ誰もわかってくれない!」と孤独な気持ちになることがあるでしょう。そんなモヤモヤをもちよって、一緒に言葉をつくってみませんか

私たちは皆、異なる身体と環境を生きています。だから当然、互いの経験内容は異なります。また、身体や環境が多数派と大きく異なる人は、経験内容も多数派と大きく異なる可能性が高まるでしょう。世の中に流通している日常言語は、多数派の経験の中で繰り返されてきた共通項、いわば「あるあるエピソード」を結晶化したものなので、身体や環境の面で少数派の人々は「自分の経験を表す言葉がない」という状況に置かれやすく、自分の経験の解釈、未来の見通し、出来事の実在性、他者との共感的な経験の分かちあいといったことが難しくなって孤立しがちです。

日常言語では表せない経験も、専門用語なら表せるということもあります。専門用語に出会って、長年、意味づけできずにいた、もやもやした経験を「確かにあるもの」として捉えられるようになり、その経験とのつきあい方にも見通しを得られるようになったという少数派の人びとは少なくないでしょう。しかし、自らがその経験をしたわけでもない専門家が多数派を占める研究コミュニティが生み出す言葉や知識は、当事者の経験を十分に表現しきれていないこともまれではありません。日常言語がマジョリティのあるあるエピソードにカスタマイズされていることによる不公平な状況を、哲学者のミランダ・フリッカーは「解釈的不正義」と呼びました^{※1}。

こうした不正義を是正すべく、日常言語でも、専門用語でも、十分に表しきれない経験を抱えた人びとが始めた研究活動が「当事者研究」であり、類似した経験をもつ仲間とともに、自分たちの経験を表す言葉やフレーズを生み出したり、経験の規則性に関する知識を生み出したりする活動を意味します^{※2}。もともとは精神障がいや依存症、発達障がいの人々の間で始まったこの活動は、やがて、子育てのモヤモヤを言葉にしたいと感じるお母さんや、理由もわからず学校に通えないこどもたち、刑務所出所後の苦労に関して周



フィンランド、イギリス、韓国、日本の当事者が一堂に会して、通訳システムと手話、字幕を駆使して当事者研究を行っている様子

囲に伝える言葉を探している元受刑者、名状しがたいストレスを抱えた企業人などにも広がり、属性や背景の違いを超えた研究コミュニティを構築しつつあります。

たとえば2001年以降、当事者研究は、精神病院に長期入院してきた人びとや、刑務所から出所した人びとの地域定着を支援する方法として活用されてきました^{※3}。また2008年以降に活発化した自閉スペクトラムの当事者研究は、当事者から提案された仮説を科学的に検証することで、ボディイメージや声のコントロールの不安定さ、パーソナルスペースの狭さなど、新しい知見をもたらしました^{※4}。さらに、当事者とともに開発したVR 擬似体験と、当事者の語りを収録した動画の視聴を組み合わせたプログラムが、受講生の自閉スペクトラムに対する差別偏見を減らすことも見だしてきました^{※5}。最近では、企業や福祉施設などの組織を、多様な人びとが活躍できる場へと変革するための方法として、当事者研究が活用されはじめています^{※6}。

孤立と分断が深まりつつある世界の水面下で進行している見え